

盗賊戦争(1915年9月)

9月2日、一連の襲撃事件が発生した。ハーリンジェン近くJ. T. ドッズと二人のアントグロ技師と数名のメキシコ人作業員が灌漑用水路で作業中、奇襲隊によって捕らわれた。奇襲隊の隊長アニセト・ピサニャは、作業員の一人がピヤ軍に加わって戦闘中負傷したときにドッズに助けられたと告げたためドッズを助命した。ドイツ人か、と質問された二人の技師は否定したため、藪の陰で射殺された。ドッズと二人の作業員を連れて南下していたピサニャの奇襲隊は、保安隊に追いつかれ、銃撃戦になった。その隙を見てドッズは逃げた。この時以来PSDの背後にはドイツがいるとする説が執拗に取り沙汰された。⁵⁹

同じ日、さらに河沿いで米軍とカランサ軍の交戦があった。9月2日夜、奇襲隊がオホデアグアを襲った。恐れをなした住民は翌朝になるまで報告をしなかった。折から旱魃状態であった南テキサスに集中豪雨が降り、リオグランデは増水し、渡河には舟に頼らなければならなくなった。それでも両軍の戦闘は止まなかった。

次の二日間ヒダルゴ郡保安官ベーカー、レンジャース三人、フランク・マッコイ大尉の第三騎兵隊は二つの渡河地点でカランサ軍と衝突し、騎兵一人とメキシコ兵数人が死んだと推定された。マッコイ大尉の報告によるとメキシコ兵は三十人程度であった。9月4日、サンベニートとブラウズヴィルの間で二つ目の鉄道の架橋が焼かれ、ブラウズヴィルとハーリンジェン間の二箇所が夜、電話線が切断された。

9月6日、元レンジャー・ベーカー保安官の保安隊が河向うから撃たれた時、彼は見せ場を作った。メキシコ人の射撃は概ね高めに外れることを知っていたベーカーは、相手の射撃の腕前を侮って、一人物陰から出て砂州へゆっくりと歩を進めた。メキシコ人が一斉射撃を加えると、倒れて死んだふりをした。メキシコ人は草の茂みから身を乗り出し、小躍りして喜んだ。それまで藪の中で待機していたベーカーの補佐がライフルの一斉射撃を加えると少なくとも四人に命中し、ベーカーはゆっくりと起き上がって陰に隠れた。⁶⁰

戦闘がエスカレートして不安にかられたメルセデスの市長はヴァレーの市長会議を招集し、一致協力して更なる保護を大統領に求める決議案を採択した。州当局は南テキサスで荒れ狂っている盗賊戦争が州内のヒスパニックを巻き込むのを恐れた。ブラウズヴィル近くの屋外ダンスパーティーで、アメリカ政府に対する謀反を扇動したとしてミゲル・サイースという男が逮捕された。サンアントニオでは千人ほどの群集の前で演説を行ったとして三人の男が逮捕され、交通妨害などの罪で二百日の禁固刑を宣告された。ジェネラル・フンストンは騎兵連隊と歩兵連隊をハーリンジェンに、更に歩兵二個大隊をサンアントニオのサム・ヒューストン基地に増強する申請を出した。⁶¹

9月9日、ライフオードでPSD奇襲隊の攻撃により、著名な店主フレッド・デイヨのテハノ従業員が殺された。騎兵隊の追跡もむなしく奇襲隊は見付からなかった。同じ日プログレッソのフェリー・ステーション近くの対岸にカランサ軍が塹壕を掘って守備に付いた。陸軍の増員や、レンジャース、警察、保安官、自警団による撲滅作戦にもかかわら

ずカランサ軍を後ろ盾にした奇襲隊は攻撃のテンポを速めた。

9月13日未明二十から三十人の暴徒がロスインディオスにあるガルヴェストン農場にある第十二騎兵隊の前哨基地を攻撃した。三十分に及ぶ交戦の結果、軍曹一人が負傷し部下の兵二人が戦死した。駆けつけた援軍は五人を逮捕し、彼らを郡当局に引き渡した。サンベニートの刑務所に入れられた五人の内三人は三日も経たないうちにハーリンジェンの刑務所に移送するために連れ出された。新聞報道によると三人は車から降りて脱走を企てたとして皆射殺され、道路わきに放置された。犯人の正体は不明のままであった。陸軍の兵士が死体を見つけて埋葬した。ガルヴェストン農園主ジョシュア・ターナーは三人の殺害を強く非難した。一人は彼の従業員、一人は同農場の小作人、もう一人は母と妹が働いている農場を訪ねてきていた者であった。犯行に及んだのがレンジャーか保安官代理あるいは自警団によるものかは結局判明しなかった。⁶²

南テキサスの混乱が手に負えなくなるのを恐れたジェネラル・フンストンはリオグランデ沿いの交戦に関し、ファーガソン知事に諮ったうえで思い切った手段に出た。レンジャースや保安官が組織した保安隊は、実際に盗賊団を追っている以外はリオグランデに近づかないことを提案した。その上、軍隊、レンジャース、地方の保安官が河岸で戦闘に巻き込まれたときには、当該部隊最上位の将校が全指揮権を掌握するとした。陸軍相長官と陸軍参謀総長ヒュー・スコット少将もこれに賛成した。

フンストンによると、盗賊団に加わる者は河向うからやって来て、アメリカ側にある秘密の場所に隠された武器を受け取って集団に加わった。彼等は追い詰められたら河向うへ逃げた。そのためフンストンは国境警備に力を入れる方策を打ち出した。先ず家畜の輸入は税関の施設を経由するもの以外は禁止した。メキシコ人の入国は、橋あるいは運行許可証を持つフェリーに限定し、軍隊はそれ以外の場所から入国した者を逮捕し移民官に引き渡すこと、最後に、軍による検問所を設け、武器を取って戦える男性で、正当な理由のない者の入国を拒否することであった。知事はフンストンの提案に賛成し、それに従って指示を出すことを約束した。ファーガソンはPSD首謀者ルイス・デ・ラ・ロッサとアニセト・ピサニャの捕獲をレンジャースに命じ、千ドルの懸賞金を懸けた。しかしファーガソンは背後にカランサ軍北東部司令官ジェネラル・ナファラテがいることを未だ知らなかった。⁶³

9月16日メキシコの独立記念日、サンベニート周辺では皆戦々恐々としていた。町で結成された防衛委員会を補強するため第四騎兵師団から二個中隊が列車で急派された。町民は金を出し合って銃弾を購入し、自動車十台を提供して歩兵を乗せ待機させた。奇襲隊が学校を占拠して要塞にするとの噂が流れた。

9月17日、ブラウズヴィルから僅か二マイル上流でアメリカ軍が対岸のカランサ軍から攻撃を受け、守備隊がこれに応戦した。双方合わせて四百から五百発の弾丸が行き交い、終わったときにはカランサ軍兵士一人が死亡、五人が負傷した。この時四人のカメロ

ン郡保安官代理とブラウズヴィルの警官一人が、応戦のためではなくただ単にカランサ軍に挑発するために対岸に向かって射撃を繰り返しているのをアメリカ兵が発見した。フンストンはこの事実を知って激怒し、直ちに知事に抗議し、カメロン郡全域に戒厳令を布くよう大統領に進言すると脅した。知事はこれを受けて保安官ヴァンに当事者の罷免を命じた。しかし知事もフンストンも命令系統が違うため、ヴァンは命令に従うのを拒んだ。この日の午後更に四十マイル上流、ダーナの近くでメキシコ兵がアメリカ兵に攻撃を仕掛け、五十人のメキシコ兵と二十人の騎兵隊が一時間に亘り交戦した。

この頃憲政軍最高司令官ベヌスティアノ・カランサがワシントンにいる代理人エリセオ・アレドンドを通じて國務長官ロバート・ランシングに、ブラウズヴィル守備隊がジェネラル・ナファラテの兵舎目掛けて砲弾を撃ち込んだ、と抗議文を送った。カランサは更にナファラテは、自分たちはアメリカ軍に発砲した事はないのに、彼の兵士が数人負傷したと抗議した。

9月18日、ロスインディオスの交戦後暫く攻撃は止んだ。ナファラテが国境から奥地へ移動させられたのと、アメリカの入国管理が厳しくなったのがその原因と思われる。素性をはっきりと明かさない者、あるいは病気を持った者の入国は拒否された。一方、メキシコ人家族がヴァレーから続々とメキシコへ引き上げていた。「良いメキシコ人」が収穫を前に畑を放棄して逃げた。ブラウズヴィルの移民局によると八月だけで五百家族、平均一家族五人すると、おおよそ五千人が脱出し、その後も同じような状況が続いた。64

9月24日、河岸の村落プログレッソが襲撃された。この地区のリオグランデは曲がりくねって水際までびっしりと草木が茂り、村沿いの長さ八マイルに亘り警備が手薄になり勝ちであった。この村の監視所には第十二騎兵隊の兵三人がいた。奇襲隊は八人のゲリラとカランサ軍兵士から構成され、未明に舟で渡河して上陸、店を掠奪して火を放った。二人の騎兵は逃れたが、兵卒リチャード・ジョンソンは捕らわれて河向うに連れ去られた。攻撃隊が掠奪と放火をしているところへ到着したアメリカ軍の救援隊と交戦の末、一人の隊員が死亡、二人が負傷した。メキシコ人は朝九時には皆舟で、ある者は泳いで引き上げた。川岸に塹壕を掘って立て籠もったカランサ軍約百人が援護し、アメリカ軍指揮官の推定によると、双方が発射した弾は三千発であった。

それから数週間、プログレッソ戦の衝撃音は鳴り止まなかった。ヒダルゴ郡役所の要請に応じて、カメロン郡保安官ヴァンは十二人の保安官代理を特別列車で送った。10月2日フンストンは山岳砲をプログレッソに持ち込んで設置した。プログレッソはそれ以降攻撃される事はなかった。フンストンの過剰反応は捕虜になったジョンソンの処遇を知ったためであった。暫くの間ジョンソンは行方不明とされて、何れ釈放されるであろうと思われていた。しかし9月29日、諜報部隊長マッコイ大尉はジョンソンの運命を知らせる情報を得た。ジョンソンはカランサ兵から四五発の銃弾を受け、首を刎ねられ、耳は削がれ、死体はアメリカ軍が発見できるように河へ投げ込まれた。更にカランサ兵はジョンソンの

首を棒に刺して、ジョンソンの戦友に見せるために高く掲げながら河岸をパレードした。

65

1920年に開かれた上院外交委員会メキシコ問題諮問委員会において、事件当時ヒダルゴ郡保安官代で特別レンジャーであったトム・メイフィールドが証人喚問された。メイフィールドはサンディエゴ計画書を携えていたバシリオ・ラモスを逮捕した保安官代理である。プログレッソ攻撃に関する一通りの質問が終わってから、委員長は次のような質問をした。「メキシコからの攻撃隊が残した武器弾薬の中に何か強力な武器、たとえば爆弾とか手榴弾などの類・・・」これに対しメイフィールドは次のように応えた。「デ・ラ・ロッサが対岸で野営をしているときに、数人のメキシコ人を使って何度か様子を探らせました。彼らは四人のジャップが牛の生革を使って手榴弾を作っていたと報告しました。自分は見たことはありませんが、多くの目撃者からその話を聞いています。火薬にボルトや鉄片を混ぜ、生革に包んで縫い合わせてから乾燥させるのです。」日本人は合図に使う呼子のようなものも作っていたという。日本人が手榴弾を作っていた場所は、国境の町レイノサから三マイルほど東にあるガラニアという場所で、彼らはデ・ラ・ロッサの指揮下にあったこと、デ・ラ・ロッサはカランサ軍レイノサ守備隊長であった。⁶⁶

プログレッソの戦闘の日、八人の盗賊団がマッカレン農場を襲った。しかし機転を利かせた家政婦のおかげで、ジェームス・マッカレンはリーダー格の男を馬ごと射殺し、防衛に成功した。二人のレンジャースと車で駆けつけたランソム大尉はマッカレンの安全を確認すると、隊を組んで後を追い、負傷して横たわっていた二人を殺し、負傷者を手当てしたテハノ二人を撃った。

プログレッソとマッカレンの襲撃から一週間経った10月1日、ヒダルゴ郡の南、ダーナ近くの道路わきに並べられたメキシコ人十一人の遺体がアメリカ軍兵士によって発見された。翌日、近くの藪の中から更に三人の死体が見付かった。伝えられたところによると彼等は皆9月24日から27日の間、レンジャースによって殺害された。新聞によると報復を恐れた友人や家族は死者を引き取って弔うことが出来なかった。郡の検視官は武装した警護を確保するまで出向こうとしなかった。⁶⁷

59. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P278
60. Ibid. P279
61. Ibid. P279
62. Ibid. P281
63. Ibid. P282
64. Ibid. P284-285
65. Ibid. P287
66. Committee of Foreign Relations, "Investigation of Mexican Affairs", Government Printing Office 1920, P1293 & 1297
67. Charlehs H. Barris III and Louis R. Sadler, "Texas Rangers and the Mexican Revolution", University of New Mexico Press, 2002, P287 & 289
ジェネラル・エミリアノ・ナファラテ
68. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1992, P117
69. Ibid. P118-119
70. Ibid. P120
71. Ibid. P121
72. Benjamin Heber Johnson, "Revolution in Texas, How a Forgotten Rebellion and its Bloody Suppression Turned Mexicans into Americans", Yale University Press, 2003, P101